

スペイン革命におけるCNT (8)

ホセ・ペイラツ

今村五月記

第九章 革命的事業

バルセロナでは七月二〇日に人民の勝利が決定的となった。

「二〇日(サンティリヤンは述べている)、バルセロナではアタラサナ兵営だけが残っていた。しかし、戦闘は結着のつかないまま長時間持続することはできなかった。包囲された者たちは生命と陣地を必死で守ったが、人民の戦士たちは勝利の決意を強くした。ディアス・サンディノは、兵営爆撃の命令を待っていた数機の飛行機を参戦させた。我々は、市の守備隊の海岸砲と砲台をすでに手に入れていた。要塞は抵抗を続けるだけでせいじいばいだった。だが、降伏の合図は何もなかった。このとき、フランシスコ・アスカソは障害物の影から銃を狙い射ちしていたが、頭に銃弾を受けて即死した。その知らせは閃光のように伝わって、包囲する者たちを憤激させて最後の攻撃にかりたてた。この突撃は止めがたい衝動をもって決行された。そして我々の同志は竜巻のよ

うに兵営に雪崩れ込んだ。一番乗りは、一人だけではなかったにしてもそのうちの一人は、ドゥルティだった。」

この話の中で、我々は、我々の主張に矛盾してまでも、カタルニアの政治・経済・軍事問題に注意を集中しなければならぬだろう。理由? カタルニャは反乱軍を最初に破ったのだ。連合とアナキストの大部分、したがって革命の指導的推進力の大部分が存在する地域なのだ。組合と政党の様々な分派の間で、また中央政府と自治地区との間で、最も激しい戦闘が行なわれた地域なのだ。カタルニャは、革命のあらゆる偉大さとあらゆる非運を集約していたのだ。

七月二〇日、戦闘の最も決定的な局面が終わった。中央政府とヘネラリダッドは瓦解した。人民は民族の運命とみずからの運命の主人だった。支配勢力としてCNTとFAIが登場した。革命的秩序を組織する必要があった。事態の絶対的掌握者だったアナキスト運動は最も厳しいディレンマの一つに直面した。ガルシア・オリベル

によれば、このディレンマは次の言葉で言い表わされる。すなわち、「アナキスト独裁と同義の自由共産主義か、それとも、協調を意味する民主主義か。」

この評価の正当性はここでは検討せずにおこう。疑えないことは、指導的活動家の大部分が現実の事態をそういう風に解釈していたことである。彼らの中で、調和を破る者たちの声は空に消え、またある者たちの沈黙は実際不可解だった。かいたく抗議した者たちと、解決不在のために沈黙した者たちとの間に、妥協的暗示が道をつけた。潜伏するファシズムへの追い打ちと革命的新経済の採用および指導に対して、何ヶ月の間、闘士の大多数と連合の母体の極めて大部分とが、前線での戦闘の提起した問題に対してほとんど注意を払わなかったことも、指摘しうる。雑多な妥協主義者の決定要素の中には、スペイン地図を見ただけでも心穏かではいられない闘争の全体的進展があった。この地図で見ると、中部スペイン一帯はファシズムの爪の下にあえいでいた。最初の蹉跌から立ち直って全力を賭ける覚悟をした敵の諸勢力は、脅威の序幕を開始していた。

これほど恐るべき問題が、アナキストと連合の闘士によって果たして徹底的に取り上げられたであろうか？ これほど危険な決定の帰結を分析するためのあらゆる手段が講じられたであろうか？ すべての支持派と反対派を冷静沈着に計量したであろうか？ 過去の革命の経験と歴史との教訓的な模範をもう一度考えたであろうか？ ガダラマ山脈、アラゴン、レバンテ、そしてアンダルシアで、地平線上に重く垂れこめる黒雲が、問題の冷静な分析を妨げた。戦争の不気味な幻影が——不幸にもそれは現実の脅威だった——、三三ヶ月の戦闘の間、多くの者の思考を妨げた。それは少なからぬ者た

ちにとって反革命の足がかりとして役だった。確実なのは、現実では必ずしも絶対的でない「すべてを賭ける」こと、あるいは「アナキスト独裁」よりも、妥協主義的判断が勝ったことだった。

バルセロナの運動が終熄すると、コンパニイスはヘネラリダットの彼の執務室にCNTとFAIを招いた。彼らの中で指導的活動家だったガルシア・オリベルもこの召集に駆けつけた。彼自身、この会談について次のように報告している。

「我々は完全武装のままで行った。小銃、機関銃、ピストル。服は破れ、埃と硝煙に汚れていた。『我々は、コンパニイスが呼んだCNTとFAIの代表だ。——と我々は長官に言った——そしてこの者たちは我々の護衛だ……』コンパニイスは見るからに感動して、立ち上って我々を迎えた。我々の手を強く握りしめ、そして、我々に言いたいことでひどく動かされて、もし彼の個人的威厳が妨げさえしなかったら、我々を抱擁したであろう。初対面の挨拶は簡単だった。我々は、各々足の間に銃をはさんで腰かけた。コンパニイスが我々に言ったことは、大要こういうことだった。『何よりもまず私は君たちに、CNTとFAIはその真の重要性にふさわしく遇されたことがなかったと言わなければならぬ。君たちは常に苛酷に迫害されてきた。そして私は、かつては君たちとともにあったのだが、悲しいことに、政治の現実に強いられて、後には対立し、迫害せざるをえなくされていた。今日、君たちはこのカタルニャの主人である。なぜなら、君たちだけがファシスト軍を破ったのだから。そして、私の党と警備隊と部下の多少とも忠実な者たちの援助が足りなかったことをここで思

い出して気を悪くしないでもらいたい……』彼はしばらく考えてからゆっくり続けた。『だが、一昨日まで厳しく迫害されていた者が、今日、軍とファシストを破ったことは確かなことだ。だから、私は君たちがいかにあり何者であるかを知って、非常な誠意をこめた口調しか使うことができない。君たちは勝った。すべては君たちの掌中にある。君たちが、もしカタルニャ大統領として私を必要としない、あるいは欲しないなら、今、そう言ってほしい。そうすれば、私はファシズムに対する闘争で一介の兵士となる。もし、逆に、私が、優勢なファシズムの前では死ぬしかなかったであろうこの地位にあって、私の党と私の名と私の威信とをもってこの闘争に役だちうると、君たちが考えるなら、それは、この市では今日終わつたにせよ、スペインの他の地方ではいっつかに終わるかわからないのだが、君たちは、恥ずべき過去は今日死滅したことを理解し、また、カタルニャが社会的にも進んだ諸国の先頭に立つことを誠実に希望する私の、人間としてかつ政治家としての忠誠と、私自身とを信頼することができらう。』

別の会議室にコンパニイスはカタルニャの全政党の代表を召集しており、そこで先に述べた交渉が行なわれていた。CNTとFAIの代表はその会議室に招じ入れられた。そこでは、ヘネラリダット大統領の示唆の下に、後に「反ファシズム民兵中央委員会」と呼ばれるようになるものの輪郭が整っていた。これは、カタルニャで秩序を指導し、サラゴサを掌握した反乱軍に対する武装運動を組織していた。

ガルシア・オリベルは、この歴史的エピソードにまつわる報告を

次のような注釈で終えている。

「CNTとFAIは、連合とアナキストの独裁によって革命の扼殺に向かうにちがいない革命的全体主義を拒絶して、協調と民主主義を選んだ。カタルニャ人の一民主義者の言葉と人間性に信頼し、コンパニイスをヘネラリダットの大統領に擁立し、支持した。民兵委員会を承認し、それを構成する諸勢力の代表による均衡を、それは正当ではなかったが——カタルニャでは少数派であるUGTと社会党に対して、CNTと勝利せるアナキズムとに等しい議席が与えられていた——、自殺的競争によって挫折するようなことのない誠実な協調的方法で、独裁的諸政党を指導するための犠牲だと考えて、うちたてた。」

CNT—FAIの代表部は、ガルシア・オリベル、アウレリオ・フェルナンデス、アセンス、サンティリヤン、マルコス・アルコンを、民兵委員として送った。ドゥルティは即刻アラゴンへ出発したために、短時間しかいなかった。

この「革命政府」の最初の布告は次のように定めている。

「ヘネラリダット政府が本日官報に発表した政令に基づいて、カタルニャ反ファシズム民兵委員会が組織され、次の決議を採択した。これを履行することは全市民の義務である。

1、革命的秩序が建設される。委員会に参画する全組織はこれの維持を協定する。

2、統制と監視のために、この委員会の発する命令を厳しく履行させるための必要な班を任命する。従って、この班は、資格を証明する相応の信任状を帯行するであろう。

3、これらの班は委員会が信任する唯一のものである。それ以外

で行動する者はすべてファシストとみなされ、委員会の決定する懲罰を受けるであろう。

4、夜間の班は、革命的秩序を乱す者に対して厳格であるだろう。

5、早朝一時から五時まで、巡回は次の分子に限られるであろう。

(a)、民兵委員会に参加している組織のいずれかに所属することを証明できるすべての者

(b)、これらの分子のいずれかが同行し、その道義的能力を保証する者

(c) 彼らに生じるべき不可抗力をみずから認める者

6、反ファッシュ人民軍の兵員を募るため、委員会に参加する諸組織は、登録ならびに訓練所を各々開設することが認められている。この募集の条件は内部規則で詳細に定められるだろう。

7、委員会は、ファシスト分子と対決するために革命的秩序の建設を必要とするが、服従させるために懲罰手段に訴えることは必要としないであろう。」

この布告が公道の目につきやすい場所に貼り出されるとほとんど同時に、マドリッドでは次のような別の布告が出された。

「内務大臣殿の命令により、いかなる種類のものといえども武装せる人物を乗せた車の通行は一切禁じられる。また、具体的な用件のための特別許可を予め用意せざる者の拘留ならびに武装解除の命令が出される。同時に、武装集団のマドリッド通過は禁止される。この処置に違反する者はファシストの擾乱者とみなされ、容赦なく法の定める最高刑に処せられるであろう。」

人民を非武装のままに、また彼らの自由を無防備のままにできた者たちがわめき始めた。武装し、国家の軍服を着用せず、みずからの運命の所有者となった人民の姿は、彼らの醜態を刺激した。だが、この人民がみずから、執心のないことと寛大を証明していた。バルセロナの戦闘が終わって四日後には、サラゴサへの最初の部隊が発射したことが、それを示している。ほとんど大部分が連合の分子からなるこの部隊の先頭には、ブエナヴェントゥラ・ドゥルティがいた。

当時の新聞は次のように報じた。

「反ファッシュ民兵委員会は、これはカタルニャにおける武力を支配しているが、反乱軍を攻撃するため、サラゴサへ労働者の突撃部隊を送ることを決定した。委員会は六千の義勇兵を送ることを決定したが、熱狂は極めて大きかった。サラゴサ行きを志願してカタルニャ広場に集まった者の数は一万人に達した。」

「全体の熱狂にもかかわらず、ドゥルティ・ペレス・フラス部隊は予定の数にわずかながら達しなかった。早くも不可解の始まりだった。戦闘はすべてを、人間、武器、労働、思考、生命、すべてをのみこむものだった。最初の遠征部隊は十分な戦闘者を得、その任務は障害に会うまいと信じられていた。出発した三千人の民兵は、歓喜と誇りと言葉につくしがたい精神とをもってそうしたのだった。」

アタラサナスの陥落後でさえ、特に地方において治安警備隊が固守した不可解な行動を考慮に入れるなら、統後を無防備にしてしまうことへの人民の疑いは当然ではなかったろうか。同じ疑いが労働

復帰命令に関しても示された。人民は街頭を離れるのに抵抗した。そして、この抵抗は、当局がどうにも甘んじたとい口調で武装解除の必要をほめかすようになるとますます増大していったのである。七月二八日の『ソリダリダッド・オブレラ』は論評でこう言っている。

「ロサスの一隊は、フィゲラスに移動して戦闘を繰り返し、その村で武力をもってファシズムを制圧した後、治安警備隊に包囲され、部隊の全員が武装を解かれたと我々に報告してきた。人民戦線の部隊と治安警備隊に相当かけあった後、やっと彼らには二五の小銃が返され、残りは没収された。同志たち、何者にも何事にも絶対に武装を解かれるな。」

同じく二八日、バルセロナの統一組合地方連盟は次の声明をもって労働復帰を指令した。

「統一組合地方連盟は、昨日開催した大会において、反ファッシュ民兵委員会と協定の上、本日、火曜日、全組合員が労働に復帰することを決定した。近代生産は、絶大な相互依存経済によって特徴づけられており、また、紛争やファッシュ的あるいは革命的な戦闘性をもつ団体はすべて、自己の維持のために不断の行動で生産の活動的弾性をまるで利かなくしてしまう。これらのことを考慮して、我々は提案する。1、その性格上、反ファッシュ戦争維持のために不可欠かつ有用と考えられない産業は、始められた戦争で絶対的に重要だと考えられる他の任務に生産者をとられる場合を別にして、即時、勤労人口を生産に復帰させること。

2 反ファッシュ民兵委員会の下部委員会で経済統制にあたるものは、対ファシズム戦争に貴重な攻撃用機材の製造に不可欠と考

えられる全産業を接収する必要を検討すること。3、この接収の対象となる個々の企業は、当該産業に雇用される労働者の日給の支払いを認め、人民の自由の防衛に力を尽くすこと。4、この労働復帰からは、民兵はすべて除外されている。彼らの持ち場には、各職業の失業者が各組合の同意を得て着く。補足、反ファッシュ民兵委員会と食糧委員会は、民兵とその家族の食料を保証すべく注意するであろう。各職場で労働を再開する必要のない産業に関し、大会の決定に従って反ファッシュ民兵委員会に諮問されたが、さしあたり、本日、火曜日に、全労働者が労働を再開するよう指示した。生産者を他の活動にとられる職場は追って決定する。——委員会」

この声明には、労働戦線に対する革命的指令が欠如していることに注意する必要がある。この優柔不断な態度を当局は利用しようとした。ヘネラリダッドは、市民財産に対する人民の運動（監視と、革命的ブルジョアや他の右翼分子によって放棄された住宅の接収）に対して、借家料は二五パーセント引き下げられるという命令を発し、即時施行すると発表した。同じ頃、マドリッド政府は五〇パーセント引き下げを決定していた。これに関して『ソリダリダッド・オブレラ』はこう解説した。

「誰に適用すべきか——バルセロナ住民は、借家料に関して最近マドリッド政府とカタルニャ・ヘネラリダッド政府とによって出された二つの命令をめぐって、誰に適用すべきか、疑問を感じている。この疑問が晴らされるといいが。我々は、もちろん、いかなる法の味方でもないが、マドリッド政府の発令した五〇パーセントの方を選ぶ。しかし、我々は、家主に適用する方法を講じ

る一方、社会全体が、それに最も有利なものを抛り所とすべきであると考えた。」(ソリダリタッド・オペラ 一九三六年八月六日)

二六日、FAIの半島委員会がラジオを通じて初の声明を発表した。その声明でも、経済の社会化の指令が欠落していることが明らかだった。ここに原文を載せる。

「バルセロナ住民ノ 反ファッショ戦争に結集した全労働者組織、全左翼政党の労働者諸君ノ この決定的時点において、バルセロナとスペインが置かれているこの歴史の時点において、イベリア・アナキスト連盟は、わが血を惜しみなく注ぎ多くの生命を犠牲にして勝利を決した、超人的勇氣に満ちる勢力であったが、ここにおいてまた、ラジオを聴いている多数の諸君に對し、その声を届けることを望むものである。全同志諸君ノ さらに努力を。そうすれば勝利は我々のものになろう。すでに七日間我々が生きてこの歴史的緊張状態をもちこたえなければならぬ。熱狂と興奮に強化されて、我々は優勢だ。サラゴサでは反ファッショ第一部隊が勝利の前進をしている。興奮に沸く叫びが町をとりまわっている。解放された住民は、バルセロナからサラゴサ遠征に出る勇士に男たちを送り出している。ファシズムはサラゴサで敗北すれば致命的な打撃を被ることになろう。勝利の意志、我々の革命と我々の抵抗の偉大な模範を世界に示さんとする意志、それは我々の持てる力であり、人民にふさわしいことだが、それによって結ばれ大きくなって前進する時に必ず可能となる大衆の至高の意志は、世界の運命に影響を及ぼすであろう。我々は今置かれている瞬間の決定的なることを冷静に理解して、開始された戦いの戦友に對し誠実をもって、すべての者に同じ誠実と同じ責任

動きをもう一度たどってみよう。

「バルセロナ水道労働組合——水の消費に関しては全く心配がないことをバルセロナ市民に告げる。水道事業は、昨日(七月二十五日)付けをもってこれを接収した労働者革命委員会によって完全に保証されており、正常な都市生活にかくも重要な要素を一瞬たりとも持たずに市をおくことのないように、カタルニャ・ヘネラリダッド政府の代表とともに協力して、すべて必要なものを接収するであろう。同時に、この公共事業の全職員に、新しい指令が出るまではあらゆる約束を排して、来たる月曜日、二七日には従来どおりの時間に各自の持ち場に出るべき義務のあることを通告する。職員の誰かが、本意ならざる理由によって、あるいは反ファッショ民兵としての兵役にあるために、労働に参加できない場合には、その不在は完全に正当とみなされることを考慮し、その機会が与えられ次第労働に参加しなければならぬ。——委員会」

「バス——通告。現在の革命的状况に直面し、ヘネラル・デアウトプセス会社を接収した。我々は、この支部に属する全労働者に労働への不参加を釈明するよう希望する。——委員会、バルセロナ・一九三六年七月二十五日」

「武装労働者の一団が、サン・アントニオ環状線のカンポ・サングラド通り角にあるバルセロナ市電会社の営業所に現われて、同所と、電車労働者に関して会社が所有している社用整理書類を接収し、通りの中央で焼却した。」

「全金属労働者へ——当フンタは、上部諸委員会が各部門へ出してすでに承認された労働復帰命令から生じた混乱に對して、我

感と、バルセロナの偉大にして忘れたい日々には我々を支えた同じ勝利への英雄的な意志とを要求する。武装せる男女よ、最高の熱狂に鼓吹された民兵よ、食料を生産し戦争物質を製造して戦士たちの生命を支えるために働いている銃後の名もなき英雄たちよ。我々は、ピラミッドを前にしてナポレオンが言ったように、

『過去二〇世紀が我々を凝視している』と考えよう。全世界は我々の行動にかかっている。我々は比類なき勇氣と全き誠意との模範であり、全員が一致団結した無敵の力であることを知ろう。戦闘へ。同志たちよ、ファシストの怪物を完全に踏みつぶそう! 七月一九日、新しい世紀の開始である。過去の平和はすでにない。血の河の中で我々は新しいスペインを産み出しつつある。FAI、革命のシンボル、大衆の自由への願いの印章、万才ノ 反ファッショ戦線、万才ノ ——FAI半島委員会」

建設的な革命の衝撃は人民とCNTの諸組合とその中心的活動家たちから噴出したものであることが、十分に示されている。徴発と接収と集産化の運動は、委員会が直面しなければならなかった既成事実だった。これまですでに見てきたように、またさらに見ていくであろうように、それは、反ファッショ戦線の均衡を維持し、敵に對する戦争を続行し、生産面の正常を確保し、公共秩序を保証することにあまりにも氣をとられすぎていた。

CNT委員会によって発せられた労働復帰命令に應えて、バルセロナの労働者は職場に復帰した。しかし、職場を放棄したと同じ精神をもってではなかった。戦闘が終わって五日目の二六日、各組合は彼らの精神、彼らの責任感、彼らの欲求が何であるかを表明するようになった。その声明や広告が新聞の全紙面を占めている。この

々の方針が以下のとおりであることを広告する。今週初めに労働に復帰した各部門の労働者は、必ず以下の形でそうした。1、ブルジョアに對し、生産は彼らの指導に一時的に従うが、同時に、この任務のために設けられる委員会が要求する収支の統制の下にもあることをはっきりさせること。2、労働時間は一時的に四四時間とする。今週中に、地方の全組合が取り上げるべき問題である最終的な時間の要求に對して、指示があるだろう。ブルジョアが生産指導に参加していない職場は、労働者が職場を接収し、組合の統制下で操業するだろう。武器を有する金属労働者は労働に復帰する必要のないことを通告する。したがって、彼らは警戒を必要とするすべての場所を監視しなければならない。ファシズムは打倒しつくされていなければならない。武器を握っていないければならない。だから、接収された全地区に必要な警備班を結成するために組合に登録しなければならない。」

経済面での革命の實際に對しては、総合的な研究、通信、公共事業、都市・海上・陸上輸送、工業、農村、銀行などあらゆる分野における研究、適切な機会と場所で行なうはずの研究が、必要ではあるが、ここでは生産部門における諸組合の最初の革命的動きを取り上げよう。

地区大会に結集した組織の決定に従って労働に復帰してみると、ブルジョアの上層指導部はすでにその責任分野から離反していたことと大多数の企業の労働者たちは気づいた。この事業は、経済上の意図的なサボタージュ、あるいは、プロレタリアートと結んだ関係を解消することへの恐怖、と説明されよう。

正常な都市生活の要素である都市輸送の分野では、故意の離反は

徹底的だった。市電、地下鉄、バス各企業の高級職員と輸送統一組合との関係は、流血の沙汰だった。革命は、バルセロナの労働者の行なった最も激しくて血なまぐさい全面ストライキの一つだった市電の全面ストライキの中で発生した。だから、ストライキと、何ヵ月間もその標章となった迫害と血との、そして、警察や殺し屋やスト破りとの衝突の、警察本部の独房における恐るべき拷問や公道における暗殺や処刑の責任者が、優勢な人民と不和を起こすことを恐れたらどうとは大いに考えられた。

市電、地下鉄、バス事業は単一の企業体をなしていた。七月十九日のうちに、輸送統一組合は接收を始めた。企業は、各企業委員会の責任において市電、地下鉄、バスの三つに分けられた。グラン・メトロと呼ばれる支線はCNTとUGTに接收された。カタルニャ・ヘネリダッドは検査官を一人任命したが、事実上は当時の形式的な役目でしかなかった。市電が実施した組織方式は三企業にとつて大なり小なり基準となった。労働、管区支部あるいは部内の代表各一名からなる企業委員会が任命された。市電の場合、委員会の七人のメンバーで構成されており、それぞれの任務は決められた事業を監督することだった。例えば、建築物の維持と警戒、統計(営業一日当たりの走行距離を知ること、使用した車体、前年同日の収入との照合)、技術業務(設備機械の修理)、運転(業務の統制と配置)、経理(収入の管理統制)、経理補佐(企業委員会を代行する出納係と書記)、支部委員会との連絡(車庫委員会、車輛洗浄委員会、線路ならびに工業班委員会、中央事業所委員会、線路清掃委員会、高架委員会、等々)。

これらの部門はそれぞれ部門別委員会をもっていて、委員会は企業、全通話、その他全分野に及んだ。管理は同じく銀行業にも波及した。CNT代表二人とUGT代表二人とからなる統制委員会の許可なくしては、会社は支払いにあてるために銀行から金を引き出すことはできなかった。この委員会は労働者集会で任命された。合衆国の大企業は、単なる収支の管理に縮小された。労働者管理はバルセロナの全本社とカタルニャの各地方の本社とに適用された。バルセロナの四つの本社のそれぞれに一人の管理委員があり、地方のそれも同じだった。後者の委員の機能は本社のそれと同じだった。本社で分かれていた各部が一人の副委員を任命した。各部の副委員は事業の進行に関する意見を交換し、なされた労働やもち上った困難を検討したりするために、それぞれの本社で委員と毎日会合を開いた。この会合の決定について委員は中央委員会に報告した。

労働者管理は企業に対して、例えば「暗黒の二ヵ年」間に導入されたスト破りのように暴行の悪名高い高級職員を速かに追放することを要求した。電話局は、七月十九日午後、革命的人民によって奪取された。その奪取のための戦闘中に六五パーセントの装置が被害を受けた。数日後、これらの建物を防壁にしていたファシスト軍との戦闘で生じた破損は労働者部隊によって補修され、その上、野戦病院と公共施設と組合とに新しい線が引かれた。

七月二十七日、UGTに属する船舶仲買業の従業員は各職場で会合し、トランスアトランティカ社を接收した。トランスメデテラネア社、イバラ社、ラモス社等でも全く同じことが起きた。これは、UGT(ここでは事務職員からなる)が集産化の事業でCNTに接近したわずかな場合の一つだった。CNT所属の船舶労働者の関心

業委員会と協議して労働を組織した。各部門の労働者が委員を直接選んだ。

企業委員会は、会社を引き取った時、銀行にある有価証券や預金などのすべての営業資料を引き継いだ。すぐ新しい管理部が協力していた技術者を吸収していった。しかし、高給で不用な官僚的職員は排除された。賃金の標準化とともに、労働時間の整備、サービスの改善、社会保障の正常化も行なわれた。市電企業で三千人、横断地下鉄で三百七十六人、バスで七百人の労働者が働いていた。

七月二日、鉄道労働者はM・Z・A線と北部線を接收した。革命委員会が創設され、小銃で武装した民兵で駅の防衛にあたった。接收はCNTによって行なわれたが、市街戦が終わるとUGTが登場し、接收に同じ比率で参加した。最初の仕事は駅革命委員会を設置することだった。これは鉄道網の接收と防衛と管理の命令を地方の全駅に発した。駅革命委員会は両組合本部から三人ずつ六人のメンバーと両鉄道組合代表の二人によって構成されていた。委員は労働を組織し企業を管理する責任があった。整理の手段として、各業務の全部長に新しい通告があるまでは労働に出ないよう連絡した。以下の業務委員会が設置された。すなわち、職場委員会、倉庫ならびに輸送委員会、車輛職員委員会、線路ならびに工事委員会、機械ならびに技師委員会。これらの委員会は、委員会代表一人と駅革命委員会の一人を中心に、毎日集会を開いた。整理された部長たちは技術者として協力した。これによって短期修復事業が組織され、急速に忠誠派全域へ広がった。

外国企業をみてみよう。電話局はCNTとUGTの電話組合の責任において直ちに労働者管理に付された。管理は設備、維持、建

は、バルセロナの街頭と港におけるファシスト軍との戦闘にひきつけられていた。だが、CNTはすぐに接收委員会に参加した。経済上の大きな困難に要請されて、残念ながら、接收をただの監督に委更する方がより好都合になった。

中央委員会はCNT(航海士、機関士、下級船員)の三人、UGT(船舶仲買業、下級船員)の三人、ヘネリダッドの代表二人、マドリッドから一人、バルセロナから一人のメンバーで構成されていた。

トランスアトランティカ社では、運動が始まった時、総計で約十万トンの船舶が数隻就航していたが、みな忠誠派地区に帰属した。職務整理が最初の処置だった。ただ署名するだけの労働でもって莫大な年間所得を得ていたような社長、副社長、その他会社の高い職階は追放された。船内司祭も同様に下船させられ、仕事を禁じられた。仕事というのは、祈禱して、甲板員や火夫よりも高い俸給をとることだった。技術職員は協力を望んだ。海上輸送労働者の七〇パーセント以上がCNTに属していた。それで、以前の船内委員会が、中央委員会の下で統制技術委員会として機能を続行した。会社の株主(イエズス会の手先)への支払いも停止された。

金属部門に関しては、労働者はある原則から接收には大きな困難にぶつかった。第一の障害は、大企業について言えば、大部分が外国人のものである個人資本のことだった。第二に、国内外における市場の喪失、原料および原料を獲得するための外貨の不足を考慮しなければならなかった。これはマドリッド政府の中央集権政策によるものだった。他方、金属業の大設備は、始まった内戦および製造方法と製造目的の深刻な転換による要請に命じられて、集産化より

も国有化にあらかじめ運命づけられていた。

例えば、ベルギー領事は金属統一組合に対し、パレット株式会社はほぼ八〇パーセントが彼の国の資本を基にして設立されたと報告した。同社は組合の管理体制下に入れられた。注文は縮少され、従って工場での運転も縮少された。この工場は一九一四—一八年の戦争中、連合国のために砲弾や榴弾を製造していた。そのため、直ちに、台頭する戦時産業にあてられた。三六年八月上旬に、統制委員会は生産と労働者の労働条件とに関してこれを引きあげ、価格まで引き上げようとした。

最も重要なもの一つであるトラス社では、五百人の労働者が働いていたが、厳しい統制が行なわれた。生産と原料や製品の出入を統制するために各部門委員会がつくられた。この会社は前線向けトラックの装甲を専門にしていた。そのため、生産は極めて活発だった。

『ソリダリタッド・オペラ』の社説から以下の文章を引用しよう。

「バルセロナに常態が回復するとすぐに、すべての大工業は解決しなければならぬ一連の問題に直面した。ある会社では指導部がなく、またある会社では労働者がすでに直接に工場を引き継いで管理と生産体制を完全に果たすようになっていたからである。これらの工業の中に、金属業の最も重要なもの一つであるマキニスタ・テレストレ・イ・マリテヤマ社があった。同社では、ふだん、蒸気機関車や重油ディーゼルモーターなどがつくられていた。同社の人事を管理している労働者諸組織は互いに連絡をとりながら、指導部と会談する委員会を選出した。この委員会

で構成され、各々次のような任務をもっていた。埠頭部（積み込み、積下し、油送船の補給）、給油部（トラック、たる、タンクの給油）、工場部（給油器の全般的修理）、倉庫部（原料の管理と割当て）、運転部（移動班）、技術および管理部。

接収は、バルセロナ、バダロナ、マンレサ、ヴィチその他の工場も含んでいた。これらの工場ではバルセロナのそれにならって管理委員会がつくられた。バルセロナ工場では百八十人の労働者が働いていた。前社長は罷免され、他の職務は集産化された会社に吸収された。労働は二交替で行なわれ、経験によって次の給与階梯が適用された。事務員一七・五〇ペセタ、熟練工一八ペセタ、見習い一五・五〇ペセタ。六時間労働制が決められた。

反乱が始まると同時に、建設統一組合は、国立労働会館とその隣りのカンボ館と呼ばれる建物を接収した。それらは、カタルニャのCNT地方委員会本部とCNTIFA館となった。

この組合は三万五千の組合員と多数の闘士を擁していた。工場主とか企業主から見捨てられた建物は組合によって接収され、利用された。労働者はその工場主たちの財産に対して銀行の当座で支払った。原則として全面的接収は行なわれなかった。建設は、事実上、革命のおかげで、経済的再建の点で自動的に新路線の方向が未決定になっていたからである。にもかかわらず、いくつかの部門は平常の律動を持続していた。レンガ製造部門は、工場の破産とレンガ製造業の共有化への移行によって、運動の始まる以前にすでにほとんど接収されていた。

公共サービスのうち、困難さで最も冒険的だった試みの一つは、バルセロナのパン製造部門だった。集産化には大きな不都合があっ

は次の代表によってすでに決定的に構成されている。すなわち、CNTのメンバー二人、UGT二人、技術部門一人、CACCIのメンバー一人、指導部一人だった。後に、時勢に伴う要求へ向けるために民兵委員会が工業に干渉しようとしたので、ヘネラリタッドは、マキニスタ社を実際に動かしている労働者の運営状態を知って干渉しようと、一人の技師を代表に派遣した。人民軍の兵役に出ている約三十人は別で、同社の全従業員が配置についていた。抜けた人員は失業中の同等の能力ある人員によって補われた。マキニスタ社は現在まで完全に代行状態にあった。株主たちは二年前に干渉をあきらめた。というのは、資本主義の危機は金属業において非常に猛威をふるったからである。同社では約六百人の労働者と、さらにサン・アンドレス工場で三百五十人が働いている。現在、M・Z・A線のための機関車六両の製造が完了した。そして、近く、トランスメデティラネア社のためにディーゼル機関四基の製作にとりかかる。ふだん営業しているのは次の部門である。第一鍛鉄工場、第二鍛鉄工場、鍛銅工場、鋳鉄工場、鋳鋼工場、海員部、旋盤部、製鋼部、工場修理部、整版、整型および大工部、化学部、倉庫部、整図部、現在のところ収益性の比較をすることはできない。というのは、工場が戦時製品の製造に向けられた時、当然のことながら、平常の労働速度を失ったからである。……」

集産化されたもう一つの企業はカンパサ〔政府の保護下にあ〕だった。以前の銀行家会議は廃止された。総会で職員が接収を決定した。六人のメンバーからなる指導中央委員会が任命された。これは各部署委員会の助言を受けた。各部署委員会は交替制の二人のメンバーが要求する強制的な賃金増を考慮すると、製パンされた小麦粉一袋当たりの利鞘が極度に減少していることを、パン経済委員会（CNTUGT）は知った。バルセロナのパン製造業を全部接収することを決めた時、パン製造労働者は、あてにしている生産と分配が停止されたものや分散したものや不健全なものまで引き受けなければならぬことになった。それでも、あらゆる近代的機械をもつ大工場をたてよう——それは終戦前に大部分が実現した——、生産をできるだけ少数のしかも最も適当なオープンで行なって、不必要な負担になる生産を軽減するために、大いに努力した。実験は輝かしい成果をおさめた。しかも、革命によって他の多数と同じ被雇用者になった少なからぬ前工場主たちは、労働者が無能の淵に沈むのを見ようと待ちかまえていたのである。ほとんど大部分がCNTに加盟しているバルセロナのパン製造労働者は、パン焼き屋の後進的ブルジョアジーに大きな教訓を与えたのだった。

一〇月六日に発表された木材部門統一組合のコミニケは彼らの計画と実際を我々に報告している。それはフンタの署名をもって以下のように述べる。

「木材部門統一組合——我々はすべてを獲得しよう——我々はすでに他の機会に言っている。すべてを獲得せねばならない、現存するすべてを変えなければならない、腐敗の中心を健全にしなければならぬ、と。我々は確固たる自信をもたなければならぬ

い、そうすることがブルジョア体制にとどめをさすものであると考
える。労働者の間に信頼を回復しなければならぬ。諸君に言わ
なければならぬ。そして我々は言う。木材労働者たち、工場主
はいない。それを諸君がはっきり理解するように、我々は現在の
均衡を証拠として提供する。勸業省の『トラブカイレス(ラッパ
銃)』の銃座に掩護された大工の親方はもはやいない。彼らに代
わって木材部門統一組合は事務所を設置した。工芸学校を根城に
していた木工屋の悪党どもは、今日では完全に制圧されてちりぢ
りになり、もはや存在しない。そして、その建物と帳簿は我々の
保管の下にある。梱包ならびに室内装飾の雇用主団体も同じくな
った。その建物と帳簿は我々がもっている。我々はすべてを獲得
する。我々は負うべき義務をもっており、革命派として責任を負
う。小工場主とこの分野の古物商人は大作業場だけに限ることに
する。これによって生産をすべて統制する。我々の連合の作業場
が建設され次第、我々は我々の活動を開始しなければならぬ。
我々はこう言うからには確信をもっているのだが、近い将来、全
生産を統制下におく唯一の組織になりうると希望している。全労
働は組合を通じて行なわれなければならない。かつて反資本闘争
の組織であったというのが真実なら、今日は生産を調整するそれ
でなければならないからである。」

九月五日に始まった第一回カタルニヤ農民地方会議は集産化に関
する声明を採択した。そこから以下の章を抜萃しよう。

「土地の集産化を決定する場合、小土地所有者が我々の解放運
動に一瞬でも不信を抱くことがないように、従って、我々の事業
の敵、障害、怠業者にならないように、彼らには彼ら自身の手で

費用が支払われ、あらゆる種類の世話が提供されるだろう。10、
子供は一四才まで学校に行く。メンバーは六〇才になればもはや
労働する義務はなく、好きなことに従事できる。11、集産体内で
は、あらゆる職業、技術、専門が可能である。12、集産体に加え
し、借家に住んでいる者は、借家料を払うよう努力する。13、集
産体は養鶏場を建設し、あらゆる種類の家禽のひなを育てる。
14、集産体に加えるには、CNTかUGTの組合員であること
を必要とする。——地方委員会」

組合ならびに労働者人民が決定したこの運動に臨んで、委員会は
穩健な態度を守り続けた。

ここにカタルニヤ地方労働連合の記録があるが、ここでは、ある
不安が窺見されるのである。

「連合組織は、最初から、外国勢力との摩擦を起こす恐れのある
ことをすべて回避した。事態に責任を負っているので、ファシ
ズムに対して戦われていることは理解するが、資本主義の国際的
防衛に利して、スペイン領土における戦闘に介入する口実を他国
に与えるような緊迫した事態を生じる可能性のあることは、何と
しても避けなければならないと考えた。昨日、イギリス領事
代理が委員会を訪れ、外国の干渉の余地を与えるような何らかの
行動をする民兵が出るのを避けるための処置を求めた。その処置
は、バルセロナに置かれているイギリスの会社のリストを我々の
側から発表して、それらを尊重するようにさせる方法に見出され
た。リストは以下のとおりである……(1)。現在では、同志たち
はみなこれらの会社が尊重されなければならないことを知っている
。このことはしかし、万一横暴があったり情報秘匿があった

耕作可能な土地の利用を、原則として認める。しかし、これは、
集産化された核のしかるべき発展を妨げ、あるいは困難ならしめ
てはならない。」

カタルニヤの野で展開され始めた集産化の主調音を説明するた
めに、ちょうどいい、エスブルガ・デ・フランコリ集産体の例を提
供しよう。それは組織規約に次のように定めている。

「エスブルガ・デ・フランコリの集産化された組織が遵守すべ
き規程——1、集産体に参加する者はすべて同等の権利と義務を
有する。2、集産化は多数決の法によって集会で採択された決定
に従う。3、集産体の一員となるために加入する者はすべて、財
産、土地、役畜とその道具、今年全収穫を集産体に提供するこ
とを要求される。4、集産体に供給するためにあらゆる種類の生
産物の分配共同組合が設置される。5、集産体、それを構成する
世帯に、その家族数に従って報酬を与える。6、独身の一人は五
ペセタを受ける。二人からなる世帯は七ペセタを受ける。三人か
らなる世帯は八ペセタを受ける。四人からなる世帯は一〇ペセタ
を受ける。五人以上いる世帯は一二ペセタを受ける。労働可能な
二人以上を有する世帯は、世帯にあてられる報酬のほかに、その
各一人につき一ペセタを受小る。7、集産体メンバーは貨幣なし
に、共同組合で、そこにある生産物を得ることが出来る。しかし、
引き出したものはすべてクーポン帳に記入され、土曜日には取得
されたすべてが勘定され、家族にあてられた全体量に不足する分
は貨幣で渡される。8、集産体を構成する者はすべて、能力と年
令と性に応じた集産体のために働く義務を有する。9、病氣、
事故あるいは不慮の不幸に会った集産体員に対しては、すべての

りして敵軍のスパイを援助してはいないかどうかを監視しうるこ
とを妨げはしない。もしこういうことが起きた場合、責任は全面
的にイギリス領事館にある。何国人であれ尊重する用意のあるこ
とを我々はすでに表明しているのである。——地方委員会」

注(1) 商社、製造業者、クラブ、銀行、英国教会、協会、貿易会
社、その他の八七社のリストが続く。この中にエプロ水力会社、
スペイン塩化カリウム会社、スペイン建設会社がある。

この外交工作は外国軍隊の艦隊の戦略と一致して行なわれてい
た。これについて、CNT-FAI情報宣伝部は、七月二六日、バ
ルセロナ港外に停泊している外国の戦艦の行動を告発した。曰く、
「軍務のため、カタパルトと飛行機を積載したフランスの巡洋
艦ダンケルクは、バルセロナ港上空をすでに飛行させていたが、
国際協定で施行されている全条件を整え、指揮権をヘネラリダッ
ド大統領コンパニイス氏に渡して入港した。にもかかわらず、相
次ぐ手続きを通じて、わが事務局は、社会党と共産党(モスクワを
仰視している第三インターナショナル)の入閣したフランス政府——
人民戦線——は、スペインの運動のこちら側にもあちら側にも位
置しないという印象を抱いた。フランス軍は、スペインの戦闘的
プロレタリアートがスペインの生活組織に与える指令を入手しう
る距離を確保しているのではないか、という疑念に我々はとらえ
られた。この点について我々はあまり考えられなかった……」

情報は続ける。

「もう一つはイギリスの船だった。この船は許可なく入港して
いた。イギリスのすべての船舶にはジブラルタルがあった……」
最後に、

「第三の船はイタリアのだった。排水量の実に巨大な装甲艦だった。そしてそのためバルセロナ港に入ることができなかったと言う。ムッソリーニ氏のファシスト政府がとってきた手続きから、スペイン・プロレタリアートがみずからの血の犠牲をもって追求した人道的かつ責任感に富む手続きまでの間にある距離について言うなら、この距離はむしろ保持される方がいい。」

「假想の「無秩序」と「革命のテロリズム」を理由に、中央政府、ヘネラリタッド政府、民兵委員会、各組合委員会を通じて外交的圧力がかけられ始めた。みずからの失策によってつぶれた共和国政府や、革命の真只中に身を投じようとする階級にとって、この圧力が何を意味するかは言うまでもないだろう。共和国は無能ゆえに軍部の蜂起に責任がある階級や政党とともに、その蜂起は国土に無秩序とスペイン史に記録される最も残忍で放縱なテロリズムをもたらしたのだが、最後には説明のできる一連の事件を理由に、人民の正義感の結果をファシズムの犯罪そのものによって扇動されたのだといばって中傷した。共和国にとっては、短時間に軍部と聖職者と大地所有者と銀行家の恐るべき謀略をうち破った人民の、勇氣と献身と犠牲とは、何ものでもなかったのである。指導者も技術者もなきに等しい有様の工業と経済との錯綜した関係を、組合の指令一つで独力で切りまわした人民のこの驚くべき態度は、何ものでもなかったのである。間に合わせの兵士でもって、技術的に訓練された正規の軍隊に挑戦したこと、前線への義勇兵を自発的に動員したこととは、何の価値もなかったのである。勇氣と献身と犠牲心と責任感と組織力を人民に認めないためには、無統制のいくつかの事件が勃発しただけで十分だったのである。」

国家的かかわりの下にある生活全体の正常化の方向に事態の進展を導くために、外国の艦隊という外国の脅威と、国内の敵という執拗な危険といっしょになって、散発的な略奪や当然の報復や想像しうる無秩序などの鉅脈を採掘することだけにだけ興味があったのだ。

実際、あらゆる革命において、ある限界を超える恐れのある場合、それを阻止する必要の前にとられるこの古典的な処置は、いくつかの委員会のスポークスマンの発表に最初から影響を与えることになった。

カタルニャ地方連合とバルセロナ統一組合地区連盟とは、革命的な人民と初めて連絡をとるべく（七月二五日）、バルセロナ放送局から次のように放送した。

「七日前、国家体制と軍の指導部に隠匿されて潜んでいたファシズムは、バルセロナとスペインの大都市の街路に死体をまき散らしながら、プロレタリアートの諸権利に対して犯罪的な反乱に立ち上った。バルセロナに関して言えば、戦闘は極めて苛烈だった。労働者の惜しみない血が滝となって流れた。だが、勝利は我々のものとなった。ファシズムはその決定的命運を革命のルーレットに賭け、そして破れた。軍の将校のほとんどを味方にしたとは言え、あらゆる大目的の推進力である人民の精神的物質的支持がなかったために、それは破れたのだ。また、プロレタリア諸組織が、展開されつつある歴史的瞬間の完璧な洞察をもって、不快や不和を追い払って革命的反ファシズムの団結にたく手を握りあうことを知っていたために、破れたのだ。国内の他の地方にはまだ、刻一刻、かなりの土地を失っていく反乱の拠点があったが（最も重要なものはサラゴサ）、それでもファシズムは

十分に証明された場合のすべてを、仮借なく、またいかなる種類の酌量もなく処分することを決定する。具体的には、個人的に行なわれている家宅捜索は中止すべきこと、宮殿広場の航海学校ビルに置かれている反ファシズム民兵委員会あるいは地区連盟、地方委員会、FAI地方委員会の連署のある証明書を有する者以外を行なってはならないこととする……」

「全同志諸君、我々は革命の現時点によって我々に託された歴史的使命を自覚するものである。まず第一に、ファシズムに対する闘争。ひとたびファシズムが打倒されたその日には、我々の組織は、状況に従ってなすべきことを決定するであろう、闘士の一人一人、革命の戦士全員が、新秩序すなわち革命的秩序の最も熱心な守護者であるように。願わくは、革命が我々すべてを血の海に沈めることのないように。厳正なる自覚、然り、暗殺、否」

一方、FAIの方は、七月三〇日に発表した声明（終るべきことを終らせる）において、以下の言葉で精力的かつ載然たる報復処置を宣言した。

「我々のところに重大極まる風評が届いた。CNT、FAI、POUMに属すると称する武装グループが家宅捜索をして、アナキズムの精神と人民の正義とに反する行為を働いたという。これは我々の組織の不名誉である。組織の委員会はこれらの野蛮な行為に対していかなる許可も与えなかった。よって、我々には言葉をもってではなく、実際と仮借ない判決とをもって、この恐るべき無責任を防止することを決定する。反ファシズム民兵委員会の付属機関として監視委員会が行動しているが、これが、かつ

「バルセロナでは無断拘留とその後の銃殺を伴う一連の家宅捜索が行なわれている。その大部分は、気まぐれでやった者か、パニックと恐怖をまき散らすために多分ファシズムに雇われた者が下手人だと、当地区連盟が考えるほど、そのような処置を正当化するいかなる理由もなく行なわれている。従って、我々とは何の関係もない。このままこれ以上続けさせることはできない。我々

てファシズム運動に関与した分子の行動について行なわれるすべての告発の証拠証明にたずさわるのであろう。この委員会は、今後、警察本部以外で家宅搜索を命じ実行する権限をもつ唯一の機関である。これ以外で行なわれることはすべて不法である。FAIは組織の外に在るという無自覚なグループにとどめをさす用意がある。組織は、ファシズムに対して立ち上った人民の革命運動を、誰が、何の目的で汚すのかを知っている。我々はどの分子であるかは知らないが、しかし、誰であれ、その行為は、意識の最も暗いところにおし隠していた原始の聲が目覚め、人民の正義の本能が墮落した不健全な精神として、彼らを告発するであろうと断言する。バルセロナに現出しているこの英雄的な事件において、栄光に包まれたFAI、自由の大理想のため、闘争においても惜しめない犠牲においても、CNTとともに先頭にあったFAIは、民衆の爆発を示す氾濫の結果であるそれらの行き過ぎに、単にいかなる重要性も認めないばかりでなく、根本的かつ精力的な手段でそれらを取締る用意がある。我々はあらゆる暴力、あらゆる強制の敵である。人民が正義の大偉業で散らした血以外の血はすべて嫌悪する。だが、我々は冷厳に、また恐るべき沈黙をもって仮借なく実行するために宣言する。バルセロナ中に恐怖をまき散らすそうした無責任な行為が完全に終熄しないなら、人間の権利に反する行為をしたと証明されるすべての人物、反ファシズム闘争の前線の分子から最も公正かつ真面目な者を選んで構成された委員会に属する連合組織が付与する権能を、自分勝手に享受したすべての人物に対して、銃殺刑を執行するであろう。我々は軋つたことは必ず実行する。バルセロナは知っている、スベ

インも全世界も知っている、FAIの人間は約束を必ず実行する、と。バルセロナ住民の名譽のため、CNTとFAIの尊嚴のため、かかる行き過ぎはやめさせなければならぬ。そして、我々はそれをやめさせるであろう。」

CNTの地方機関紙は、問題を、社説の一つとして取り上げ、議論を集中した。ここに『ソリダリダッド・オペレラ』の声明がある。

「バルセロナでは、互いに勝利をめざして戦う二つの部隊しか存在しない日が二日間続いた。人間が自分の中にもっているあらゆる本能を解き放つには、爆薬の匂いほど格好なものはない。他方、これらの騒乱は、エゴイズムと復讐本能を満足させることにしか関心を持たない者たちに対して、統制が失われる事態にまで達した。ただこれらだけに限らず、この一週間にバルセロナでは、CNTおよびCNTとともに革命に参加した全組織が起らないように望んだいくつかの事件（伝えられるほど多くはない）が犯されたにちがいない。にもかかわらず、我々は悲嘆にくれる声に和することはできない。彼らは、いずれにせよ、ファシストの反乱の責任者であるばかりか、何年間も、実に何年間も、人民に対して永久の貧困とさらに永久の非文明状態を守り続けてきたことよって責任者であるからだ。本職の批評家がやらないのだから、我々は、全部が全部略奪ではなかったのだと訂正印を付ける義務がある。搜索や放火した建物で発見された莫大な有価物件はいかなる個人の懐に納まったのでもない。CNT諸組織と反ファシズム民兵委員会とは、四百万ペセタに相当する貴金属や芸術品を保管している。新聞は、一週間以内に食べる物のなくなるこ

とを知っている労働者たちの行なつたそうした性格の無数の引き渡しを公表した……」

これら連合機関紙の言明を、二八日の紙上に発表された次の記録が追認している。

「CNTとFAIの同志は、司教郎とヴィチの教会から発見された総額千六百万ペセタを、反ファシズム民兵委員会に引き渡した。」

他方、命令に背いた数人の連合の分子が、その違反を理由に組織の命令によって銃殺された。その中の数人は著名な闘士だった。ホセ・ガルデニャス、バルセロナ建設業部門の場合、また食糧組合議長フェルナンデスの場合など、革命の歴史はかくの如き状態だったが、彼らは混乱と無力の時間を越える力がなかったのだ。さて、革命に不可避の行き過ぎが犯されたことは確かだとして、

大部分の処刑の裁判の資料をごまかして無効にしようとしたことも同様に確かである。人民の勝利の決定的瞬間に、労働者階級にとって呪うべき存在だった分子の多くは、彼らの過日の抑圧的態度が忘れ去られるようにと、大あわてで変節した。その中には、工場主や警官や獄吏や、裁判長、拷問の下手人、スパイ、殺し屋、プロのスト破りなどがいた。彼らの多くは、ある職務と従つてある政治上の身分との処罰不可能の権利によって身を守ることに狂奔した。勘定を決済しようとする人民は頑固だった。バルセロナでの殺し屋ラモン・サレスの逮捕と極刑、アリカンテでの彼の同僚イノセンシオ・フェセドの死刑執行など、代表的な例を引用することもできる。二人とも、アニードールレギ兩將軍の悲劇の総督時代に、ポアルやペロナスやセギやライレトなどのそのように、バルセロナで犯さ

れた数千の暗殺の下手人あるいは共犯者だった。

非常に話題になったデシデリオ・トリリヤスの場合もこのカテゴリーに近い。トリリヤスはもう何年間も港湾施設労働者を契約するカシケで、情実と不和と締め出しと、多くの家族を強制した「飢餓契約」の鼓吹者だった。

恐るべき「赤い伝説」を広めるのに、すべての党派がかなり貢献した。高く売りこうとする軽薄な文筆家の熱心と快活と公然たる党派性は、青色テロのものすごさ、フランコに動員された犬どもの群が毎日犯した数知れぬ残忍な暗殺を広めるのに、さらに貢献した。

一〇月上旬、マドリッドの弁護士会は、世界のすべての文化的良心に対し次のような声明を送った。

「みずからの義務の本質に背き、スペイン人民に対して彼らを守るために彼らに与えた武器をもって戦いを挑んだ軍部が解き放つた一連の恐怖と残虐とは、弁護士会の政府フンタをして、人類も基本的な権利のかくも血まなまぐさく狂暴な蹂躪に抗議し、すべての善意ある人々の連帯を得るべく、文明世界に対して呼びかけることの絶対にやむなきに至らしめている。

内戦とは常に苛酷なものであった。それは兄弟の絆を断ち切ると同時に憎悪を刺激する。しかし、この反乱軍は集団犯罪の最も残忍な行為をすら凌駕する行動をしており、非人間的の精神を思わせるものがある。

我々は法にたずさわる人間の切なる叫びが地上のすべての同職者としてすべての高度の文明諸国の文化的民衆の間に反響と支持とを見出さんことを願うものである。ただし、人類の連帯は全世界的

なものだからである。

我々は、民主主義のイデオロギーを深く確信するゆえに、ファシズムの敵であり、その政治体制の支配する主要な諸国の文化的で同情に富む民衆にも我々の声が届くことを願っていると云わなければならぬ。

不明確な政治的色分けによって世界世論が導かれるような混乱を避けるためには、スペインにおける公然たる反動の特異性が究明されなければならない。いわゆるスペイン・ファシズムは、イタリアやドイツのファシズムとは何ら共通するものを持たない。この区別は、後者について必ずしも我々がより少ない非難を表明するという事ではない。逆に、古い偏見と最も前時代的で異端審問的な宗教熱を擁護する軍部の反乱の前にスペインがさられているという事実を確認するものである。それは、スペイン人民に対して、スペインを近代国家にする正常な進化と発展を妨げようと、手段も選ばず最後の力をつくしている。過去の王政はスペインをあたかも植民地の如く支配した。その無能ゆえに、人民の天才が獲得したものを失わしめてしまった。そして今日、その最後の植民地だったスペインについて、伝来の道具たる軍部でもって再び植民地時代に引き込まうとしている。使っている軍隊に至るまで——アフリカから運ばれたムーア人正規軍と外人部隊——そういう深い歴史の真実を告発している。確かにスペインは、今や自由の大国であるアメリカ植民地が過ぐる世紀に戦ったように、その解放のために今日戦っている。

これら前時代的軍団を鼓吹している精神は、フェルナンド七世とカルリスタ戦争の粗野で狂信的な偏執性に満ちた絶対主義——

期え付け、闘牛場に向けて発射して冷酷に彼らを銃殺した。死体は闘牛場に恐しい山を築いた。労働者の数人は負傷したままだったが、その苦悶の声を気にとめる者はなかった。

サラマンカ選出議員で名声大いなる社会主義者弁護士ホセ・アンドレス・マンソも同市の闘牛場に引き出され、銃火を浴びた後、剣で殺された。

セヴィリヤ市内だけで、ゲリラ戦を全部別にしても、九千人以上の労働者と農民が暗殺された。労働者地区で、正規軍とムーア人と予備部隊の兵士たちは、大変質素な平屋造りの家々の通りを駆けまわって、窓から手榴弾を投げ込んで家を壊し、婦人子供を殺した。ムーア人部隊は際限のない略奪と暴行に走った。ケイボ・デ・リャノ將軍は、反乱軍の粗野で低級な精神状態を示す彼のマイクを通しての雑談で、これらの部隊に婦人を犯すよう扇動し、下卑た皮肉を交えてこの種の残酷な情景を語った。

コンスタンチナ、カルモナ、ボサダス、パルマ・デル・リオ、ペニャフォル、アラニア、カサリヤ、プエブラ・デ・ロス・インファンテス、ヴィリヤヌエヴァ・デ・ラス・ミナス、ペドロソ、ラ・カンパナ等のアンダルシアの村々では、エストレマツラの多くの村々と同様、それらの村にはいかなる兵力も存在しないのに、反乱軍の飛行機は平和な住民を爆撃し、多数の婦人や子供を殺した。婦人たちのほとんどが、家族のパンを工面するためにパン屋の店先に長い行列を作っていた。そして、この不特定の婦人の群衆の頭上に、飛行機は面白がって爆弾を投下した。妊娠中の多くの婦人にひまし油と石油を混ぜたものを無理に飲ませた。アルヘシラスでは、彼女たちの一人は、夫がジブラルタルに逃げた

それからはただの一日も経過していないかの如き——と同じものである。司教と僧兵とレケテ〔一九世紀のカルリスタ戦争の王党派〕の赤いベレー帽が復活した。スペインを殺してきたムーア人に、司教は祝福をたれ、敬虔な顔をして彼らの胸にイエスの印をつけ、護符だと言う。

我々は、スペインを浸すこの遺伝的野蠻の波に直面し、あまつさえ、独立国家の利益に根本から反する他国の帝国主義的野望に押されて、世界の道義的支持を乞うものである。忠誠軍に捕われた時、数人の隊長から発見された印刷した訓令に印されていた反徒たちの指令は、最も冷酷な皆殺しとテロリズムの指令である。その訓令は、防衛意欲をすっかり吹き消してしまうような恐慌をつくり出すために、労働組合諸組織の指導者や労働者ばかりか、彼らの家族まで無慈悲に殺すよう命じている。この訓令は、遂行されている恐怖に関して、その行動の指揮官に全面的自覚と責任を得させるものである。反徒たちがスペイン市民を苦しめている無数の畜行をこの文書で語りつくすことはできない。一日を経過することに、数えきれない恐怖の光景が展開される。我々は、ここで、集団犯罪の重大性を示すそのうちのいくつかだけを書こう。そしてそれらに対して国際世論に訴える。

反徒に占領された地域では、彼らは、組合員証を持っていた労働者を全員、計画的に銃殺した。街路に遺棄され、あるいは舗道に不気味な山をなしている彼らの死体は、なぜそうなったかを明らかにするよう、足や腕に自分の組合員証を結びつけている。

バダホスでは、ファシスト軍は侵入するとすぐ、千五百人の労働者を闘牛場の囲いの中にとじ込めた。広場の露天席に機関銃を

と知らされたので、その液を多量に飲ませた後、夫に会いに行かせた。彼女は翌日行き倒れて死んだ。

占領した地域で捕えた左翼議員と何らかの名声を持つ人士は、すべて銃殺した。

有名なヒメネス・デ・アサア教授の名高い愛弟子、高名な議員でかつ弁護士であるルイス・ルフィランチャスを、ラ・コルニャで銃殺した。

ログロニョでは、村長のドン・バシリオ・グレシアと医師パリエホを銃殺した。非常に優秀な弁護士でまたコルテスの議員でもあるランドロヴェエを、彼の父親と同じくヴァリャドリッドで銃殺し、後にラジオを通じ冷酷な皮肉をこめて、事務所に出なかった。その刑罰を課したと発表した。

ラ・コルニャの知事ペレス・カルバリーヨ氏は、文庫ならびに図書館員団体に加わっていた極めて上品な女性である夫人とともに銃殺された。議員のアリセダ・アルティン・デ・ニコラス・ドラド、アントニオ・アクニャら多数の者を、同様に夫人や若い息子たちといっしょに処刑した。

コンドバの近く、現在は共和国軍によって解放されているエル・カルピオ村では、村を数日間支配したファシスト隊長が、二百人の労働者を墓地に連行し、大きな墓穴を堀らせた後、銃殺した。その後、太鼓を叩いてふれまわり、彼ら労働者の家族に、埋める前に会って何か形見を取ることができるよう二時間の猶余を与えると住民に告げた。これは痛ましい情景を現出した。書くにたえない悲しみである。だが、さらに恐るべきことに、それらの労働者の家族たちがそこに集まってきた時、彼らを射と命じて

暗殺したのである。

モロンではわが軍がこの市を解放した時、乳房を切り取られた女性を数人発見した。村の壁には次のような野卑な落書があった。『俺たちは死ぬだろう。だが、お前たち女はファシストを産むだろう。』別の場所では、女たちの頭をかみそりで刈り、公園で裸体にして踊らせた。

カスベ（アラゴン）では、ネグレテ隊長と彼の部下の中尉とは、治安警備隊長と結婚していた娘と、母親と、未亡人と、村長ラトレの四才の娘とを銃殺し、しばらく後には村長も暗殺した。弁護士アレハンドロ・ブランコにも同じ運命が見舞った。要塞が築かれていた人民広場のバルコニーで、ファシストたちは地方の左翼の人物の子供や夫人を胸壁に立たせた。グラナダでは、偉大な作家、天才詩人、すぐれた劇作家だったガルシア・ロルカを暗殺した。彼こそは疑いもなくスペインの若き文学者のうちの最高の人物であった。

バエナ（コルドバ）では、アントニオ・モレノ・ベナブエンテの証言によると、社会党の集会所で労働者組織の整理カードが押収され、それに載っていた者は全員銃殺に処せられた。その恐るべき狂暴性は、他の地方と同様、自分の墓穴を掘らせるまでの極端に達した。社会党グループと社会主義青年のそれぞれの議長であるグレゴリオ・ロンソとマヌエル・セヴィリャノと後者の書記長エドゥアルド・コルテスは、殊数つきにしておいて、現場に三人の家族を立ちあわせて上、銃殺した。

この組合の三百七十五人のうち、先月二十九日まで二百九十六人が銃殺された。八月九日には、村の古い城を捕強するために三

十八人の労働者が強制労働をやらされ、鞭で追われ、食物ももらえず、休みもなく、四八時間働いたあげく、堀に蹴り込まれた。そのうち三人はこの死を被る前に発狂した。

カルピオでは、FAIの活動家六人をわら小屋にとじこめ、ガソリンをまいて火をかけた。全員抱きあって死んだ。

カストロ・デル・リオでは、労働者の最もすぐれた分子を、牛のように斬首した。

ペドロ・アバド（コルドバ）の社会党グループの書記長ラファエル・ガルシアは、七月二日、そこに到着したファシストが七人の労働者を捕えてトラックで村はずれまで運び、ガソリンをかけて焼き殺したと証言している。

ナヴァルモラル・デ・ラ・マタに入ったムーア人正規軍はこの上もなく残忍な光景をつくり出した。住民を殺し、家屋を荒した。極右分子は最上の家具をもっていたため最も罰せられた。ファシストが入ってくるよう祈っていた多くのカトリックの女たちは、犯されて殺された。

サラゴサでは約二千人の労働者が銃殺された。

常に善行を心がけていた高潔な人物アルクルド博士は、若冠十七才の子息とともに捕えられた。子息は父親の目の前で銃殺され、少し後に父親は、前もってその恐るべき苦しみを受けつつ、処刑された。

冗慢に列挙することで一切の細部を世界世論に報告する弊を避けて、それらには、スペイン人民がみずからの尊厳と自由と生命のために反対して戦っていることの運動のあらゆる恐怖と野蠻が印されているのであるが、我々はいま、この文書に終止符を打

つ。なぜなら、スペインの教皇派ファシズムのテロの手段におけるかかる野卑と残酷、かかる無情を綴らねばならないのを見ると、ペンは苦悩と嫌悪に打ち砕かれるのである。』

この文書には、会の最長老エドゥアルド・オルテガ・イ・ガゼットと、書記長ルイス・スピリャガが署名している。本文で確認されるとおり、ここに述べられた犯罪は事実の色あせた横写に過ぎない。アントニオ・ヴィラプラナは身の毛の逆立つような著書『余は信仰を与える』の著者である。ヴィラプラナはフランコ政府の本営ブルゴスの審理法廷の書記だった。そして、著書にはとても信じられないような野蠻な場面を描写して、その行なわれた場所をあげ、旧カステイリャの役人の反自由主義的性格を述べている。作品は、新しい蛮族に侵された自由主義地域、たとえばガリシア、アラゴン、アンダルシア等で行なわれた犯罪の重大さに関する確実な証拠を提供している。

弁護士会の文書がふれている、ファシストによって突撃部隊と占領部隊に与えられた訓令というのは次のものである。軍部の反乱後一二日目の七月三〇日、スペインの新聞はこの報道を載せた。

「ガダラハラで捕えられた将校の一人から次のような印刷された紙片が発見された。

『勝利を獲得するための第一の要件は、敵の志気をくじくことである。従って、共和国政府は我々に抵抗するための軍隊と武器に欠乏してはいるが、なおこれらの訓令を厳守することが不可欠である。』

1、銃後を確保するには敵に恐怖を植えつける必要がある。このために、我々の部隊が一群の居住地を占領した時には、捕える

ことができた当局者に建康的かつ決定的な制裁を加えなければならない。発見できない場合は、彼らの家族的者をもって前述のように行なう。実行に当たっては、公然かつ印象的な性格をもたせるよう努力し、我々に抵抗する者に対しては誰であれ同じ方法がとられることを教えること。

2、公共建築物や、体制に同情的な個人の建物などで発見された金属貨幣を徴発することは、非常に好都合である。場合によっては、建物や収獲物や家畜などを破壊することが特別の効果をもつであろう。

3、すべての地域で、教区の司祭や他の教団関係の人間から、住民の最も特徴的な考えに関して情報を得ることは非常に有益だろう。必要に応じてスペイン・フアランへ黨員と合同する場合に、将校あるいは下士官階級でいかなる不都合があってもならない。

これらの分子は任務として軍隊活動を与えられており、気力のない行動を中止させるために軍隊を親しく監視することがある。いずれかの部隊で躊躇あるいは命令に対する抵抗あるいは逃亡の意図などが生じた場合、司令官や将校は民間の応援分子とともに最も精力的な活動に従事させなければならない。軍隊の弛緩が生じるまでにしていくより、間違いを犯す方がよいと心得るべし。直接の成功がいかなる種類の疑いも起こさせないような軍事行動の迅速かつ幸運な成功は、この敵しきにかかっているのである。この命令の実行をためらう者は、彼自身、前述した型の人間とみなされるであろう。

4、敵の志気をくじくために、まれにしかないとだが我々に重大な抵抗で応じる場合には、敵の戦線の後衛に発見される村落は

すべて、要攻撃地区とみなす。

重要事項。指摘された場所に戦闘部隊が存在しないことは問題ではない。逃げる住民たちによってばらまかれる恐慌は、我々が必要とする志気の上で効果をもたらすのであろう。

極秘。戦闘部隊を最も志気沮喪させることは、野戦病院と負傷者撤収部隊とが攻撃されるのを見ることであると証明されている。したがって、この大戦の知識を覚えておくのは好都合である。

5、あらゆる可能性に反して、マドリッドが我々に抵抗するならば、送電線および水道の破壊を基本目標とみなされなければならぬ。後者は近年非常に効果的である。

6、マドリッドに入城したら、おそらく二〇日ごろのことだが、最初の処置は、教会の塔や、その他広い射程距離を提供する建物にどこにでも、機関を設けることである。機関銃は射程距離内に入るすべての敵の分子の上に、性を問わず発射されるであろう。死傷者を出さなくとも、恐怖をまき散らし、住民の積極的抵抗を阻止するのに役立つだろう。

7、非常に重要かつ秘密の事項。軍隊が発射体を「ダムダム弾」に変えるよう、指揮官はいかなる指示もしないだろう。この作戦が行なわれるかどうかも知らない振りをする。そして、これを奨励するために、敵に大きな怒りを表明し、彼らの「狙撃兵」らが類似の発射体でひき起した恐るべき破壊に激しく抗議しなければならぬ。これによって十分であると考えられるはずだ。』

この印刷物の真正性は、戦争全体を通じて彼らの犯罪的指令がすべて文字通り実行されたという事実によって確認される。この指導理論がファシストとヒトラー流によることもまた間違いない。

これら集団犯罪とその犯行の巧妙さを検討したなら、「赤」のせいにかされる行き過ぎがどこにあるのか？ スペイン人民は、彼らが購ったその国土を占領している大土地所有者、資本家、貴族、聖職者、軍隊によって破られ、裏切られた後、みずから防衛しよう挑戦され、攻撃され、強制された者であったことが、故意に忘れられていたのだった。

(六〇ページ下段より)

同様にリーニジによって結合していながら、国家と言った形態をもつものがあり、国家の形態をもつても、支配者が被支配者の関係だけのもの、そして征服被征服の関係をもつものが分類される。プガンダ族では召使をやとうのに、非プガンダ族か、自分にながりのないプガンダ人しか使わない。それは親戚を召使にするのは家族全体が当惑し、恥じることだからである。ところがルオ族は「むかしながらの平等主義的な体系をもち、近代的地位差をこえて、非常につよく男系の規制がものをいい、親戚が召使としてやとわれ、それも公然と召使の資格においてではなしに、主人対召使の存在しない伝統的な体系におけるように、家族の一員としてやとわれるのである(リンハート著「社会人類学」から)。

人類の社会に色々な結合形式はあるにしても、生得のものとして権力意志や奴隷性を考えることは間違いで、こうしたものを持つ政治構造も人為的なものであり、変革すべきものであることが分るのではない。そしてベルグソンの同種二形発生(ディモルフィズム)の考え方を基礎として、支配と服従の関係を、指導被指導の関係を、分業的關係において再考することを提言する。

(つづく)

編集後記

八号を出してから半年が過ぎた「光陰矢の如し」というが、過ぎ去ってみると、まったくそうだと実感する。年三回のペースが容易に確立できないのは、結局、自分の安きに流れる性向に甘んじているからだろう。

『黒の手帖』はだれのためでもない、自分自身のために、自分のなかで発酵している思想のたまりを追求し、表現する場を確保するために、発行することにした雑誌だ。思想が枯渇し、表現する欲望が衰弱すれば、中止するか、あるいは思想が湧き出し、表現する欲望がふくれあがるまで、発行を待たなくてはならない。

しかし、そうではなくて、さまざまな外的条件に妨げられて、発行が遅延するのだとすれば、この外的条件は、最大限排除するよう努めなくてはならない。

それは外的条件との格闘であるかのようにみえて、じつは外的条件の投映であるもう一つの自己との格闘に還元される。主体的とか、自立とかいう言葉は、気軽に口にされてはならない。それは、怖いほどの精神の緊張と鞭打を自分に課することになるからだ。

田木繁「官尊民卑の傾向について」は、一九五〇年頃に書かれたものだが、そこには、六〇年代に、にぎにぎしくうたわれた自立が、じつはどれほどに苦澁に満ちた選択であるかが、じつくりと書き込まれている。この世界で詩人として生きることのむずかしさ、人間として生きることの哀しさを、ここに読み取ることでできるほどのものは、かるがるしく「人間として」というような大それたことは口にできぬだろう。

六〇年代の「自立」の選手たち

はいまどうしているか。彼らの力量は、今日の思想の混迷を將來するのが精一杯であったのだろうか。功成り、名遂げたものごとく、著作集を世に送っている、あまりにも日本的な姿を見る時、淡い期待は淡い幻滅へと変わらざるをえない。

今年に入って、ヴィルヘルム・ライヒの著作がつきつきに訳出され、これからもさらに紹介されるというが、その思想的意味をじっくりわがものにしていくとする気配は、あまり感ぜられない。ライヒ紹介がたんなる紹介に終わり、例によって例のごとく、一つの「流行」に流れさせぬことを、考えていきたいM・L・ベルネリ「ヴィルヘルム・ライヒ論」は、それへの呼び水である。ライヒに挑戦する読者の投稿を期待する。

一八号まで全部品切れ。

黒の手帖 第九号

一九七〇年六月二十日
発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社 東京都新宿区北山伏町三三
(大沢方)郵便番号一六二
電話二六〇局・八五二七
振替・東京一〇二四六五
印刷所・株式会社清水印刷所 東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇
電話三六三三局・五一二二

定価・二〇〇円

送料・四五円

二号分前納・四五〇円

四号分前納・九〇〇円

(いずれも送料共)